

# 精霊になれる日



和田知子

カメラ雑誌のページがパラパラとめくれ、その中から、一対の黒い瞳が強史を見ている。

目をそらすことができず、見つめ返した。この瞳をどこで見たのだろう。

世界最古の裸族、ヤマノミ族のページだった。

この部族には会ったこともない。けれども、懐かしい思いを抱くのはなぜだろうか。

突然、背後でシャッターを切ったカメラマンに驚いたのだろう。振り返りながら驚きつつも、まっすぐこちらを見つめる少女。黒目がちで恐れを知らない無垢な物腰。勝手にシャッターを切ったカメラマンに、今にも文句を言い込み歩み寄ってきて思うに思えた。

ヤマノミ族は一万年近く原始生活を送っているらしい。なぜ続くのか。何を考え暮らしているのだろうか。

撮りたい。これを撮ったカメラマン以上に自分も撮りたい。

いや、撮るだけでなく生活そのものを取材してみたい、と強史は思った。この雑誌のようにワンショットだけではヤマノミ族をあまり知ることができない。暮らしを連続して撮りたいものだ。

手の平がじつとりと湿り気を帯びた。開いたり閉じたりを繰り返した。

十年かけてブラジル保護区にいるヤマノミと交渉を続けた。ブラジル観光局に助けをもらい、やっと取材許可を得ることができ、カメラを持ち込んだ。二〇〇八年の十一月から一年かけて、ヤマノミ族の集落に同居して撮影することが許された。

いいものを作るためには金に糸目はつけない、そんな社風があった。大きい仕事をやる強史を、周りは支えてくれると思っていた。

夏が終わり、秋が始まる頃から準備を始めた。やることはたくさんあった。何かを始めようか。ディレクターがつくので勝手なことではできない。音声も同伴するらしい。細かい準備に追われ、飛ぶように日々は過ぎていく。気がつけば、カレンダーはあと二枚で一年が終わろうとしていた。

あつという間に出発する日 came。ディレクター、音声マンと共に、日本を離れて飛び立った。朝、局を出るとき霜がおりていたことを思い出した。これからのものを撮るんだ、という思いは寒さを寄せつけなかった。二十八時間後にはブラジル。遠い国だと思った。

ブラジルの空港は強い香辛料の匂いがした。空港に充滿していた肉と香辛料の強い匂いには閉口した。それでも空港は空港だった。セスナに乗り換え現地に着くと、違いをはっきりと感じた。ここはジャングルなんだ。荷物をおろし、腰を伸ばした。セスナから降りた途端、濃厚なジャングルの匂いを嗅いだ。ついに来たんだ。別世界だと感じた。空港の乾いた空気とは違う。想像していたような焼けつく暑さではない。湿度の高さが際だたせている土、緑のむせかえる匂い。原色の花は大きくどぎつい。顔を近づければ、舌が飛び出してきて食われそうな気さえする。

ジャングルに圧倒されていると、酋長がやって来て歓迎してくれた。お互いに笑みを浮かべ、ハグを受ける。

すぐに関係者に連絡をとり、撮影への協力を求めた。しかし、大所帯は避けたかった。ヤマノミを驚かしたくなかったからだ。ありのままの姿を撮りたかった。ディレクターは現地の人間に協力を求めてかけずり回っていた。強史と音声マンは自然を撮ろうと歩き回った。

しかし、全員が歓迎してくれたわけではない。武器を手に、睨みつけてくる男がいた。無関心を装う者。どう対応したらいいかわからないという表情を浮かべる女の子たち。敵ではないと知らせるため、強史たちはヤリを持つ男に両手をあげて降伏のしぐさをした。あまりの弱さに女子供もあきれたように、苦笑いを浮かべていた。

雨が降ると、森が一変すると酋長は言う。今は雨季なのだ。他の匂いがかき消される。雨の気配が漂っているのも頷ける。一旦降り出したら、えんえんと降る雨。やむのを待つしかなくなる。到着した日が降っていなかったのは、さいさきがいいという前兆だろう、と良いように取ることにする。

これからだ。強史たちの態度でヤマノミの心をとかすことができるだろうか。いい画像が撮れるだろうか。

酋長の許可を得て、同じテントに住むことができた。巨大なテントの下で、たくさん家族が同居している。シャボノと言っていた。

強史はカメラを担いで、テント内を撮影した。カメラに向かって脅してくる者がいる。どこの世界でも子供は正直だ。不思議そうに見慣れぬものをさわりに来る。無意識に、あのカメラ雑誌に載っていた少女を捜した。

しかし、どこにもあの顔はなかった。内心がっかりしながら、彼女に会いに来た訳じゃないんだぞ、と自分に言い聞かせた。

一族を驚かしたくなかったので、シリアルバーなどは持ち込まなかった。シャボノに住んでいる家族から食べ物を買ってもらった。けれども、基本自給自足だ。腹一杯に食べられず、水でごまかし、下痢に悩まされた。

そんな中、音声マンはあまりにきついのでこの仕事から手を引かせてくれ、と言いつ出した。仕事にかける情熱はそんなものだったのか、と冷めた目で音声マンをじつと見つめた。やつは意見をかえようとしめない。だが、待てよ。ヤマノミの言葉にしろポルトガル語にしろ、日本人には理解できない。画を流す前に日本語の吹きを入れると画が生きたるが、この場合うまく使えない。ナレーターを入れて画を流し、音声はカメラに付いているもので十分かもしれない。音声マンは現地での自分の仕事があまり役立っていない、と悟ったのかもしれない。しようがない。ディレクター、カメラの強史と、ここで手伝ってくれる助手を雇い、三人でやっていくしかない。

ディレクターが会社に連絡をとり、音声マンが帰国する旨を伝えた。すると、その電話で強史の父が入院したという連絡を受け取った。あんなに丈夫だった父が衰えたのか。不死身かと思っていた。しかしここアマゾンにおいて、音声マンが帰国してしまい人手が少なくなるというのに、強史が帰れるわけではない。どうしようもないのさ。ディレクターの言葉に首を振り、撮影続行を希望した。

雨季が終わると、乾季が待っている。十二月から四月は乾季になり、撮影に走り回ることができる。助手をしてくれる現地の者が見つかった。三脚等を持ってくれる人間が必要なのだ。胸をなで下ろした。ディレクターは周りを見落とさないように見渡し、撮影するものを探す。強史はディレクターの指示を察しファインダーを覗く。助手は強史の後をついて廻る。三人は最初のうちはいいものを撮るんだ、と希望に満ちあふれていた。

けれども次第に焦燥していった。無理もない。カロリーメイトなど彼らの前では食べないようにした。どうしようもなくなると、近くにあるブラジル国立保健所に助けを求めた。保護区の近くには必ず保健所があった。保健所で食べ物をもらって栄養をつけても、シャボノに戻れば、元の木阿弥だ。文明国の食べ物で彼らを脅かしたくなかった。そのためほとんど栄養をとることができず、どんどん肉はそげ落

ち、下腹がでてきた。立ちくらみに悩みながらも、絶対いいものを撮るんだ、という信念のみで動いているとあってよかった。体は虫に刺されまくり、栄養失調で目が回って力が入らない。一日中、体中がかゆいのだ。体中腫れていた。頭の髪の毛一本一本から足の爪の先までかゆい。人間かゆさでは死なないというが、いらいらして集中できない。アリや蚊が鼻や耳の穴、果ては尻の穴にまで入ってきて刺す。かゆくても手が届かない。予防接種はありとあらゆるものを接種してきたが、同じ種類のを何回も打たなくては効かないような気がした。

アマゾンの中で一番多いのはアリだ。日本のよりずっと大きい。アリは動物に群がり、全てを食い尽くす。

ヤマノミの集落では、死ぬとその魂はアリになり、やがて精霊となって森に帰るという言い伝えがある。

ここでは何もかもが特大サイズに育ち、色鮮やかだ。原色の世界が広がっている。原始の生活では五感が鋭くなる。そうでないと、ここでは生きていけない。だからこの民族は、大きな目を見開き迎りをうかがっている。夜真っ暗になると、人の話し声、虫の羽音、獣の遠吠えが響く。夜、用を足したくなったら、落ちてくるムカデを振り払い、ことを済まさなければならぬ。ジャガーの短く低いなり声が聞こえてくると、尿意は引っ込んでしまう。下腹が張って重たくなっていく。森の匂いに敏感になる。人間はモンゴロイド系なので強史たちと体のサイズはかわらないはずだが、大きく見えた。圧倒されていたのかもしれない。疲労が重なっていく。シャボノにつるしてある、一族の食糧がなくなってきた。強史達に食べ物を恵んでいるせいかもしれない。シャボノにつるしてある蓄えがなくなってくると、男達は森に入る。ある日、森に狩りに行く男達に同行させてもらった。きつい。何度も休んで歩みを止めてもらう。

ふと少年が矢を構えた。

「猿だ」

ディレクターは呟いた。言い終わらないうちに、強史はカメラをチルドアップして撮っていた。根元からなめるように木をたどり、はるか上の方にいる猿にカメラを向けていた。ディレクターと強史はいつもこうだ。あ、うんの呼吸で、ディレクターが言葉を発する前に撮る画を追いかける。

猿はあまりに上にいて狙えない。少年は自ら木に登り、猿を追いつめようとした。

しかしうまくいかない。猿はさらに上に登り、他の木に移っていった。逃げられた。少年の負けだ。狩りは難しい。ヤマノミでは、獲物を仕留めたら一人前だ。一人前と認めてもらうには、もっと狩りの能力が高くなければ駄目なのだ。

強史たちが足を引つ張ったせいか、結局その日は何も収穫はなかった。

ヤマノミの中でも、時期リーダーの地位を狙うものがいた。どこの世界でも同じだ。NGOは次期リーダー候補を選び、学校で学ばせ、「文明」社会の知識とポルトガル語を習得させた。これからはポルトガル語ができる者が次期リーダーだ、と言うものもいた。

が、大半のヤマノミは、ただそこに仲間や自分がいるから生きていた。このアマゾンの奥地があるから、そこに生きる。森はすべてを与えてくれる。死ねばアリとなり、やがて精霊となって森に帰る。この地こそが彼らにふさわしく、与えられた生を楽しんで生きていた。カメラを向けると、笑顔を見せてくれた。

男が狩りをしている頃、女たちは森で過ごしていた。木の実を取ったり、森の植物で我が身を飾ったり化粧したりしていた。強史はそんな彼女たちの後をつけて撮影をしていた。水浴びをしている少女がいた。こちらを振り向いた。あの射るような眼差し。あの雑誌の少女だった。雑誌に載っていた姿とは違っていたから、見つけることができなかったのだ。少女は妊娠していた。少女は十四歳だった。

このシャボノで少女の妊娠は珍しいことではない。十四という年齢も。ここでは結婚前の妊娠は珍しくない。取材を申し込んでみたけれど、少女はカメラに多くを語ろうとしない。「わからない」ばかりを繰り返す。これでは撮ってはみたもの静止画を見ているようだ。それでも、毎日少女を追いかけると、日々お腹は大きくなってゆき、少女の表情も変化しているような気がした。本人は呑気そうに見える。両親は困り果てているように見えた。

ここでは湿地帯で性行為をする。湿地帯にはカエルがおり、それを食べる蛇がいる。毒を持った蛇にかまれたら死ぬ。死と向き合った場所で行為に及ぶのだ。

永遠に撮り続けていたいと思った。かれらの習性に触れる度、その原始性に驚きながらも畏敬の念を感じていた。

五月から十一月にかけて、雨季がやって来ようとしていた。雨季が終わり、乾季が来る頃には撮影を終えなければならない。それまでに、できるだけ多くのものを撮りたかった。その瞬間が来るまで一秒でも長くカメラを回していたかった。

しかし彼らは淡々と強史たちの帰国を受け入れた。強史たちクルーは、結局最後まで族からはよそ者扱いだった。よそ者がいようといまいと、彼らの生活は続く。あんなやつらがいたなあ、といつか話に出ることがあるだろうか。

何度も振り向きながら、アマゾンを後にした。セスナの窓から見えるジャングルの緑がアマゾン川が遠くなり、やがて点となった。

飛行機内で死んだようにうずくまって眠った。日本に着く直前にやっと目が覚めた。隣ではディレクターの体が、座席からはみ出していた。乱気流に突入しても目を覚まさないだろう。苦笑した。強史も同じようなものだ。

「もうすぐ着きますよ」

ディレクターに声をかけると、うめきながら返事らしき言葉を発した。何か言ったようだが、強史には機内の騒音で聞こえなかった。再度聞き直す気になれず、窓の外をぼんやりと眺め、到着を待った。

帰国した日本は冬だった。アマゾンの乾季から日本の冬へ。時差ぼけに加えて体が対応しきれない。強史はぶるつと震えた。悪寒がした。

喧噪に耐えられなかった。夜の灯りが眩しかった。眠ることを忘れた街のなかで、いつ人は眠ることができのだろうか。異邦人になったようだ。強史の場所はどこだろう。地に足着いて安心して生活できるのはここのはずなのに。皮膚をむしばまれ、熱を持っていた。心も体も熱を持っていて、いつまでもさめることがなかった。

日夜、うなされた。はっと目が覚めると、ここはアマゾンじゃないんだ、と気付く。ほっとしたような、残念なような気持ちの中、眠りに戻る。意識が渦の中に飲み込まれてゆく。

日本では、シンプルに生きることが難しい。選ばれた者の自意識過剰の中にあると呼吸するのが困難になった。

いつから日本はこんなな生きにくくなってしまったのだろうか。

十年もあって準備が十分にできたはずなのに、と局では失敗と見なされた。何とでもいうがいい。強史たちは最高の仕事をしたと思っていた。ただ、よそ者にすぎない。一万年前からの暮らしを続けている族とは、完全に分かり合える方が難しい。友好的になりすぎなかったから、永遠かと思われる年月を生き延びてきた一族なの

ではないか。ブラジル社会と接触した村は、以前アマゾンにはなかった病気が流行した。マラリアのように。友好的だったものは病気をうつされ死んでいった。

よりよい画像を求めて進む。それが強史たちの権利であり、同時に義務なのだ、と信じていた。そのためにはもっと一族の中に溶け込みたかった。

しかし、彼らにとって強史たちはあくまでよそのものであり、ヤマノミではないのだ。それをわきまえての撮影だった。

引いては繰り返し出る熱のせいで、いつまでもふらふらした。強史は孤独だった。

アマゾンの原住民「ヤマノミ族」の取材から戻って間もなかった。父が亡くなったと連絡が入った。

カラスがとまっていた。屋根に四、五羽並んでいる。一羽が飛び降りて目の前を飛んで行く。

家で葬式をせず、葬儀会館にて家族葬を行うことになっていた。通夜、葬式と会館で行い、自宅には一切戻らない。最近はそのようなケースが増えているのだという。

会館に到着すると一室に遺体と共に入った。連絡を受けて駆けつけた伯母、母、強史と並んで、説明を受けた。決めることが多い。頭が回らない母と強史のかわりに、伯母がてきぱきと決めていく。住職を呼んで、枕経をあげてもらう。伯母は明日の段取りをつけると帰っていった。

母と強史の二人で父の側に布団を敷いて、一晚過ごした。母は、ひっきりなしに一人でしゃべった。

「お父さん、お前が生まれたときはそりゃあ、喜んでね」

「ちゃんと食べてるかい、大分痩せたじゃないかね」

時々相づちを打ち、言葉少なく答えた。

そのうち母は話し疲れたのか、軽いいびきをかいて寝息を立てだした。

寝顔を見つめた。強史が家に寄りつかなかった年月の間に年老いて、疲れ果てた顔をしていた。こんなに年よりも老けた顔にさせた原因の一因は自分にもあるのだ、と胸が痛んだ。けれどどうしようもない。過去は変えられない。前に進むしかないんだ。今やれることを精一杯やるしかない。

翌朝、湯灌を済ませ、きれいに整えてもらった父は生きていたようだった。トレードマークの眉毛を逆立ててある。強史の記憶にある父は、恰幅がよく、こんな痩せ



こけた顔ではなかった。痩せると顔の相は違ってくるのだ。胸が押さえつけられたような感覚に陥った。生前はあんなに憎んでいたのに。

納棺を済ませた。ドライアイスで冷やされていたが、時間と共に顔は変わった。皺がなくなり、蠟人形のようにつるりとして、のっぺりとした顔になっていった。盛夏ではないといえ、友引のため、葬儀が一日延びたのでどうしようもない。身内だけの通夜はひっそりとした時間が進んだ。

朝目覚めると、強史は思った。ああ、父は死んだ。死に顔が再度見たくなくなり、棺の中に横たわる父の顔を見に行った。脳裏に焼き付ける。昨日よりさらにのびた顔になっていた。

朝早くから関係者が慌ただしく出入りした。

葬儀は涙をこらえて終わり、斎場に向かった。霊柩車に母が乗った。一人しか乗れないので、母は不安がった。強史は、白木位牌を持ち、親戚と一緒に、タクシーに乗って霊柩車の前を走った。

母のきょうだいは四人いたが、やっと生まれた男の子は病弱で結核で亡くなったと聞いている。長女、二女と三女である母の三人は生き残った。この長姉が葬儀をとりしきっており、母は言われるがままだった。

梅雨明けの空には積乱雲が広がっていた。台風が近づいている。

実家の庭にはアジサイやクチナシの花が咲いていた。コナツツの香りに似ている。よく見ると、黒い虫が点々と付いていた。その虫に導かれるように、足元にはアリが這いつくばっている。強史は小さなアリが進む方向に足を踏み出し、通せんぼをした。アリはとまどったように立ち止まった後、向きを変えて進みだした。根元に隠れようと、せわしなく手足を動かす黒い姿をじっと見つめて見送った。

位牌の前で手を合わせた。位牌は四十九日を過ぎて本物がもらえるらしい。葬式の時のものは、いわば仮の位牌だったわけだ。仮の位牌は大きく金の飾りまで付いていた。

拝み終わって振り返った強史は、母の日常について尋ねた。

母は言った。

「お父さんの書齋を片づけているんだよ。欲しいものがあれば持っておいきよ」

父の書斎に入るのは二十年ぶりだろうか。

「整理してるんだよ。あとの者が困らないようにね」

強史は母のあとから、部屋に入ってしまった。

父の匂いが充満しているかと思ひ、身構えながら足を運ぶ。驚いたことに、かすかに漂っているだけだった。戸棚の中も整理してほとんど処分してしまったのだという。

「私が死んだ時、お前が困らないようにしておこうと思ってね」

母は言う。女はたくましい。これが、あの母の言葉だろうか。いつも伯母や父の前で小さくなっていた人と同人物とは思えなかった。

昔風の書棚を開けると、がらんとした空間の中で、一眼レフカメラが黒く重そうに居座っていた。レンズは錆びてシャッターがおりないだろう。ほんのりと埃を被っていた。

カメラを手にとって、フィルムを巻き上げシャッターを押してみた。動くじゃないか。小気味良い音を立てて反応する。母を振り返った。

「お父さん、毎日磨いてたんだよ。入院してからは、毎日磨いておくようになっていわれてたんだけど、私はそこまで手が回らなくてね」

強史はファインダーを覗き、母を撮りながら言った。

「母さん、おばさんから電話がきたんだ。これから七日毎の法要に付き合うよ」

母親は振り返りながら、つぶやいた。

「いつかお前がそういつてくれる、と姉さんが言っていたんだよ。いつまでも待つつもりだったけど、いつ言ってくれるのかと不安でたまらなかった。姉さんには世話になりっぱなしなんだよ」

強史は翌週も実家に帰り、母を撮った。ファインダーを覗くと陰影が濃く見えた。くたびれた母がそこにいた。

週を重ねる度に母の疲労感が増していくように見えた。それでも、強史は撮り続けた。なぜこんなに撮ろうとするのかわからない。でも、撮らずにはいられなかった。ただそこに被写体があるから、撮り続けずにはいられない。

そして、やっと来週が四十九日だという週は母の顔はそれまでとは違って疲れの極地にいながら、それまでの母からは抜け出して別人になったような雰囲気があった。法要は生きている者が諦めの境地を得るための段階なのか。

「姉さんには世話になったから、四十九日が済んだら食事に招こうと思うんだけど、どうかねえ」

強史は同意した。

昼頃には会社に着いた。制作課の部屋にはもう何人かが来ていた。パソコンを立ち上げメールをチェックしようとした時だった。

「おい、ニュースだぞ」

ディレクターが近寄ってきた。

「なんすか、どうしたんです？」

「ニュース、みてみるよ」

テレビモニターをつける。

ちょうど、ニュースキャスターが読み上げているところだった。

しかしキャスターの声が耳に入る前に、ニュースボードに記されている文字が強史を引きつけた。

「ヤマノミ族、大量虐殺」

「なんだって」

耳を澄まし、キャスターの声を聞こうとした。キンキン響く声は聞こえてきたが、内容が理解できない。ボードを凝視した。

振り返って、ディレクターの顔をみつめた。首をふるだけだった。

慌てて現地に問い合わせしてみた。ブラジルとは十二時間の時差だ。こちらは昼だから、向こうは真夜中だ。かまうものか。

足取り重く休憩室のドアを開け、窓近くの机に片尻を引っかけた。風が吹き荒れて、ネオンの灯りが揺れている。ここは夜でも真っ暗にはならない。眉間の深い皺を指でつまみ、長く息を吐き出した。

去年はアマゾンで過ごした。年間平均気温は二十七度。湿度は通年八十パーセントを超えた。あのアマゾンは暑かった。

一人一人の顔を想い出した。あの少女はどうなったのだろうか。

ブラジル国境付近でガリンペイロ（金鉱掘り）に殺されたらしい。黒こげになった遺体が出てきたという。狩りに行っていた三人が戻ってきて見つけたとのことだ。

あの村がいつ襲われてもおかしくなかった。

長老の顔を思い出す。彼は言っていたではないか。自分はやがて死ぬ、と。

リーダーが変われば、変化が訪れるだろう。一万年続いた暮らしも、いつかは変わっていく。それは地球の変化とともに避けられない現実なのかもしれない。二千百年までにアマゾンの森の三分の二が消滅するというシミュレーターを見たことがある。かつてディレクターが担当していた番組だ。

強史はヤマノミに固執したが、ディレクターはもっと大きな視野から特集した。ディレクターの指示に頭に来ることもあるが、強史はカメラで撮ることができればそれでよかった。番組はディレクターが編集して仕上げるものだ。

できることなら、ヤマノミ族が望むような暮らしを続けさせてやりたい。そのための協力が必要なら、いつでも手を差し出すつもりだった。

死んだら、アリとなり、精霊となって森へ帰る。それまでは現世を味わう。そんなシンプルな生活があつていいじゃないか。

しかし、いつもこの世はままならない。そんな中でも譲れないことがある。画を世間に見せるために、強史はこれからも撮り続けていく。

机から降りて、窓に近づく。オフィスの窓なので開かない。電車が止まる前に帰るよう指示する館内放送が流れていた。

帰るか。

制作の部屋を覗くと、ほとんど人がいない。

「早く帰らないと電車が無くなるぞ」

ディレクターだった。

「ディレクターこそ、みんな帰っちゃったのになんているんすか」

「もうちょっと。早く準備しておかなくちゃいけないんだ」

「今日じゃないといけないんすか」

「すぐ出発できるようにしておきたいからな」

いいわけをしながら、ディレクターは手を動かしていた。

「ヤマノミのニュース、聞いたっすか？」

ディレクターは書類から目をあげて、頷いた。

「聞いたよ。大量虐殺だろう？俺らにはどうしようもないな」

「そうっすか」

沈黙が二人を包んだ。

二人を包む空気を断ち切ろうと、強史は慌てて言った。

「それが終わり次第すぐ帰った方がいいすつよ。じゃお先に」

おざなりに返事をして、書類に戻ってしまったディレクターを横目で見ながら、強史はエレベーターに向かった。

建物から一步踏み出した。

空はアマゾンにつながっている。

強史はあの少女の出産を撮影した時のことを思い出していた。

乾季の頃、出産の時を迎えた。難産でなかなか産まれなかった。祈祷してお払いを受け、やっと赤ん坊の泣き声が聞こえた。驚いたことに撮影の許可が出た。ディレクターは強史にそっと目配せをする。強史がひっそりと女達についていく。ディレクターはその後ろを歩く。木の根元に座りこんだ少女がいた。足元にはへその緒をつけたままの赤ん坊が泣いている。レバーのような胎盤も転がっている。少女は動かない。いや、動けないのだ。じっと待つ。永遠の時間だけが流れる。虫のカサコソ動く音のみが漂う。

やがて女たちとテントに戻るよう、強史たちは促された。

立ち上がった少女は戻ってきた。赤ん坊は森へ帰した、といった。精霊となって森へ返したのだ、と。バナナの葉に包んでアリの食べさせたのだ。誰も何も言わない。母のみが赤ん坊を人間として受け取るか、精霊として森へ返すか決定する。男は出産に関与しない。赤ん坊を連れて帰ると、黙って狩りを増やす。少女の場合、夫がいない。もし連れて帰ったら、老いた父親が狩りを増やしたのだろうか。人間として受け取り、連れて帰るのは半分にも満たないという。女は暮らしのことを考えて、選択するのだろうか。出産を終えた少女は、二三日もすると元気になった。他の女たちと仕事をこなすようになった。子守や川での魚とりなど、やることはたくさんあるのだ。

少女の後ろ姿は少女のものではなかった。それは妖艶な女の腰そのものだった。出産を経ると女は変わってゆく。

ヤマノミでは、亡くなった人の関係するものを全てを燃やしてしまう。彼らは文字を持たない。故人の痕跡を一掃するのだ。死ねばアリになり、そのうち精霊になる。森に戻る、という考えなのだろう。故人のことを忘れようと努める。名前を口に出

してはいけない。胸の中にしまっておく。それは、この世を生きるにふさわしい方法に思えた。

シヨックを受けたのは、生まれたばかりの赤ん坊は母親が抱けば人間、そうでなければ精霊として森に返すことだ。母親は、へその緒をつけた赤ん坊を土の上に産み落としたまま、レバーのような胎盤をバナナの葉に包んでシロアリに食べさす。それが終わってから、赤ん坊を抱きかかえる。それで初めて人間と認めるのだ。その光景が忘れられなかった。中絶という観念はない。産み落としてから、人間として受け止めるか、精霊として森に返すかは、母親が決める。家族はその意志に従うのみ。精霊として返す時は、シロアリの巣に入れ巢ごと燃やして森に返すのだ。母親はすぐに日常に戻る。誰もが、その原始的な制度に驚く。しかし、強史はそこで暮らすうちに、一万年以上続く生活慣習こそが正しく思えて、現代社会のごまかしに疑問を抱くようになった。

あの少女自身も精霊となってしまったのだろうか。

台風一過の朝。母と強史は寺にいた。四十九日を近親者のみでひっそりと済ますつもりだった。けれども、参列したい、と後から後から人が訪ねてきた。伯母から聞いたのだという。

伯母に電話をしてみても通じなかった。もう一人の伯母も不通だ。食事をする予定のホテルにも姿を現していないらしい。人はひっきりなしにやってきて、寺に入りきらない。時間になって、院主が始めると言い出した。寺を開け放し、お経を始めた。

強史たちは聖典を手に持ち、拙いながらお経を院主のあとについて読み上げようとした。けれども、後から後からやってくる人たちに米つきバツタのように頭を下げ続けた。しまいにはお経に合わせてお辞儀をしている自分が可笑しくて仕方なく、笑いを抑えるのに頭を上げることができなくなっていた。